行田いきいき委員会　川越まち歩きツアー（第４回市民公益活動推進委員会）実施報告

日時：平成２４年６月２２日（金）
午前９時～午後４時３０分

【参加者】　園田佳代子委員、塚本信夫委員、
齋藤貴美子委員（代理：木村浩章氏、水口永氏）、
杉田政道委員（代理：長谷川浩氏）、中村博行委員、
町田光委員（代理：佐々木裕代氏）、田尻要委員、矢本政子委員、
長澤理香オブザーバー（関東経済産業局）
事務局（地域づくり支援課）　浪江美穂課長、吉田兼弘主査、市川諭主事

【概　要】
午前１０時３０分～
●ＮＰＯ法人川越蔵の会　陶舗やまわにて　代表理事　原知之氏
蔵のまちを活用した観光まちづくりについて、パワーポイント及び資料により説明を受けた。
任意団体からＮＰＯ法人へ移行する際、様々な意見が出たが、「より会としての責任を持つ」「北部だけでなく市全域へ活動を広げたい」との思いから、２００２年１２月にＮＰＯ法人化した。

＜主な質疑内容＞
Ｑ　テレビの影響はあったのか。
Ａ　観光客の底上げになった。
Ｑ　まちづくりを始めるとき、最初のメンバーはどうやって集めたのか。
Ａ　最初は仲間内で声掛けして人を集めた。
Ｑ　モデル事業が採択された原動力は何だと考えるか。
Ａ　皆４０代で自分の仕事を持っているが、自分の町に愛着を持っているからと考える。
Ｑ　イベント等、成功例と失敗例はなにか。
Ａ　失敗は、川越蔵里を整備する際、地元への根回し等が出来ていなかったことである。それにより、地元ではない蔵の会が調査等することで地元の反発が起きた。ただ、基本的には失敗してもいいと思ってやっている。
Ｑ　今後、考えていることは。
Ａ　川越市全体の活性化である。
Ｑ　女性の視点はどうか。
Ａ　お茶会や織物市場の会等は女性が中心である。理事の中には女性がいないが、商店街の理事の中には６名女性がいる。
Ｑ　川越市はＮＰＯが活動しやすい街か。
Ａ　ＮＰＯ同士の横のつながりは全くない。行政とは程よい緊張感により、お金をもら

わない代わりに、文句を言う。でも、やることはやる。というスタンスである。
Ｑ　市民が蔵の会を見て、どういう風に思っているか。また、知名度はどうか。
Ａ　知名度は低く、他の自治体、特にまちづくり系の方が、興味を示している。

午後１時３０分～
●ＮＰＯ法人くるみの木　　アンテナショップくるみの木にて
代表　谷三穂子氏　　岩崎廣司氏
くるみの木オープンまでの経緯や活動等について、パワーポイント及び資料により説明を受けた。
これまでの運営の中で見えてきた課題とすると、「良い物でなければ売れないが、ヒントは客がくれる」「人通りがないと売れない」「働きたがっている障害者は多い」ということ。
また、目指すものは、「つながる・つなげること」であるとのこと。
今後の目標は、「アンテナショップの拡販」「地域、他団体との連携を推し進める」「ボランティア等、支援の拡大」とのこと。
＜主な質疑内容＞
Ｑ　１日の売上はどのくらいは。
Ａ　平均２万円弱である。なお、商品開発する際の上限は５千円としている。
Ｑ　Ｂ型支援は別団体か。
Ａ　一番星という別団体である。
Ｑ　川越は、障害者に優しい町か。
Ａ　バリアフリーになっていない箇所があり、優しいとは言い切れない。
Ｑ　行政の支援はあてにしていないということか。
Ａ　決してその様なことはない。声が掛かるのを待っている。
Ｑ　「くるみの木」の名前の由来は。
Ａ　語呂がいいのと、強いイメージがあるからである。

午後３時３０分～
●意見交換会
１分間スピーチカードより
【感じたこと】
・若い人達が中心になって作っていくまちづくりが大事。
・自分の町が好きという素朴な気持ちがないと、「街に関わる」「何かをしていこう」と思わない。
・あまり行政を頼りにせず、自分達でできることからするのが、長続きするコツ。
・専門家を交えた組織作りが大事。
・行田は新しいものの考えかたに否定的。
・人の意識が前向きになるようなまちづくりをするべき。
・川越は専門家を入れていろいろなまちづくりをした。行田も専門家を入れてまち並

みを作ればいい。
・リーダーが４０代で若く、川越を何とかしたいというバイタリティがあるから成功したと感じた。
・次のリーダーを育てているということに感心した。
・行政に頼らず自分達で次へ次へと考えてやっている。
・先へ先へ、何をやるかを考えながらやっている。
・活動の原動力が自分の町に対する愛着。
・市民の自発的な活動が、市民活動のいいあり方ではないか。
・助成金やモデル事業をうまく利用している。
・行政に頼らないで、行政をうまく利用することが大事。行政に頼りすぎると継続していかない。この町が好きだ、こういうことをしていきたいという自主的な思いがあったうえで、行政を利用するといったスタンスで活動を始めていくのが大切。
・原動力が世の中のためとか金儲けではなく、自分達がやった方がいいと思ったことをやってる。
・活動を楽しんでやっている。
・ＮＰＯと行政は、何か共通の目的があったときに一緒に事業を行っている。
・情報発信を積極的におこなっていく必要がある。
・情報交換等を行いながら、課題や必要なこと等を引き出せればいい。
・蔵の会の本物志向という点は、行田には欠落していると感じた。
・くるみの木は、まさにこれこそコミュニティビジネスであると感じた。収益を上げようとか儲けようではなく、収益自体が障害者の喜びに繋がったり、１円でも 10 円でも工賃が上がることへの喜びに繋がったりすることを、市民等に伝えたりして、共感が得られている。
・意識の高い人がいる。
・皆、当事者意識がある。
・戦略をきちんと持っている。本物とか本質が分かっている人がいる。

【今後どうしたいか】
・若い人達が定期的に集まり、何でも話しあえる場所を作りたい。
・一部の人しか知らない活動が多いため、ＮＰＯ同士の活動を知り合う情報交換、活動発表の場として、ＮＰＯ主導での市民活動フォーラムみたいなのができたらいい。
・行政、ＮＰＯ、商店会などのネットワークをつくる。
・町の中に市民が集まって買い物でもできるスペースを作りたい。
・見聞きしたことをいろいろな人に少しでも話す座談会みたいなものができればいい。そして、そういうことから、行田にもっと活気をもたらしたい。
・市民の自発的な市民活動の支援ができればいい。
・行田の課題を明確にして、そのためにどういうことをやっていったらいいのかを少しずつ絞っていく必要がある。その中で、具体的にどういうことをやっていけるか検討するのがいい。

・何かをやりたいと考えた人が活動するときに手を挙げやすい環境づくりができればいい。
・市内でどういう活動をしているのかが市民に伝わる仕組みづくりが必要と感じた。今までは何かやるときに行政が音頭をとる、あるいは市民からの要望である。一緒にやって、お互いに理解の中で活動を進めていくのがよい。
・行政と市民が向き合うのではなく、同じ方向を向いてやっていけるような雰囲気が必要。
・次代を担う若い人達に考えてもらうため、若い人を対象（年齢制限を設けて）に覆面座談会をやる。
・市民の筋トレが足りない。ワークショップ等でもむのがいい。
・メリットが分かると人間は動く。街がよくなることが分かるとモチベーションになり、成功するとインセンティブがつく。
・蔵の会も最初は商店街を何とかしなければという思いや、死活問題からのスタートだったが、結果としてまちづくりというよい方向に進んだ。それは、戦略が正しかったからである。
・行田に住んでいても何をしなければいいのかがよく分かってない。だからこそ、自分自身を見つめ直すことが必要である。

その他意見

委　員）市民から要望があったとき、要望した人と一緒に現地を見て意見交換することが必要。

事務局）要望に応えた時に市民が喜んでいるかが重要であり、一緒にやることで市民もまちづくりに責任を負うという意識を持つことが大事。

委　員）ワークショップ形式では最初はいろいろと言い合うが、目標が共有できるようになると、発言内容が文句ばかりではなくなる。いろいろな意見が出るが、それは、従来までの審議会や委員会とは違い、市も一緒の場で一緒に考えていることを市民が感じ取るからだ。

事務局）それは市民公益活動に限らず全ての事業に当てはまる。

委　員）行田市民に居住年数、居住意向を聞くと、居住意向がない。長く住むと愛着がわき住み続けたいのが普通だが、長く住んでいるのに出て行きたい、少ししか住んでいなくても出て行きたい。結果、総じて皆が出て行きたいという答えになるのは危険な兆候である。

事務局）今、埼玉地区で、支え合いマップをどう生かすかの勉強会をしたいとの話がきている。今後、いろいろな内容で、いろいろなエリアで、勉強会が出来ればと思っている。